

連載 自称基礎情報学伝道師の心的オートポイエティック・システムからの眺め 第 21 回 大学入試改革に名を借りたコンピュータシステムに翻弄された某学校

埼玉県立浦和東高等学校・情報科教諭 中島 聡

新型コロナウイルスに対する緊急事態宣言が解除され2ヶ月近くになりました。第2波、第3波という話もありますが、皆さんの状況は如何でしょう。伝道師の勤務校も7月に入ってから登校と授業日課が元に戻りました。それまでの分散登校では1つのクラスが2つに分割されていたので、9クラスを担当している伝道師は、同じ授業を18回も行うことを余儀なくされました。重複した授業が減った今はかなりホッとしています。そんな中「さて今回のテーマは何にしようか」と考えていた7月10日の朝、NHK総合「おはよう日本」で「文部科学省が一般社団法人の教育情報管理機構に対して運営許可を取り消す方向で調整している」との報道がありました。まあ、近いうちにこうなるだろうとは思ってはいました。むしろ、何故もっと早く決定できなかったのか不思議です。そこで、今回は大学入試改革に名を借りたコンピュータシステムに振り回された哀れな高等学校について勝手に愚痴って(考えて)みようと思います。

文部科学省がぶち上げた大学入試改革が不発のまま終わろうとしています。目に見える形として出てきたのが2017年7月に文部科学省が公開した「大学入学者選抜改革について」になります。そこでは次の3つが柱になっていました。

1. 英語4技能を取り入れる。
2. 自らの考えを立論、表現するプロセスを評価する。
3. 生徒の過去の主体的な活動を評価する。

一見すると、どれも真つ当な考えのような雰囲気があります。文部科学省は、1については「英語の民間検定試験を活用する」ことで、2については「国語と数学で記述式の問題を行う」ことで実現しようとしてきました。が、その結果は既にご存知の通りです。どちらも現場を無視した机上の空論ですし、企業の利益追求が透けて見えていましたので当然の結果です。残った3については「調査書や、面接・ディベート・プレゼンテーションなどの志願者本人が記載する資料を積極的に使うこと」になっています。この中で現場にとって大きな問題になるのは調査書です。まず書式が変更になりました。初めてその書式らしきもの(後で登場する大手受験企業からのリーク)を見たときは仰天しました。該当する内容の記載は備考欄になるのですが、この枠が可変で無制限なのです。そのためA3片面1枚だったものが、なんとA4で2枚以上無制限だったのです。生徒の主体的な活動を制限なく記載できるように配慮した結果だそうですが、ここを埋めるのはクラス担任の仕事です。形式上、志願先の大学の指示された内容を記載することになっているので、真に無制限になることはありません。ですが、大学の記載要求が何になるのか、その年の入試要項が公表されるまで解りません。生徒が受験校を決めるのは最も早くても3年生の初夏ですので、それまでは調査書の備考欄に何を記載すべきなのかは全く不明なのです。これに正面に対応するには、クラス担任は担当する全生徒の高校生活3年分の主体的な活動を全て把握する必要があります。また、ある生徒が同じような学部学科を志望したとしても、大学によって記載内容の要求が異なれば、志願先別に異なる調査書を作成することが求められるのです。面接・ディベート・プレゼンテーションなどは、志願者が本人のことを本人のために行うことなので問題はありませぬ。必要ならばいくらでも作成することでしょう。

でも、これをクラス担任に押し付けるのならば、単なる教員いじめでしかありません。これが高校教員に対する「働き方改革」なのか！という批判を回避するために出されたのが「e-ポートフォリオ」になります。

本学会員の皆さんに e-ポートフォリオを説明するのは釈迦に説法かも知れませんが、門外漢の方もおられると思いますので少しお付き合いをお願いします。まずは e が付かないポートフォリオについてです。本来は、作品や文章を纏めておくファイルを指すのだそうです。それを活用した評価方法をポートフォリオ評価(Portfolio Assessment)といい、ロンドン大学教育研究所のシャーリー・クラークを中心に 1980 年代に開発されたようです。評価の対象も様々で、中には生徒自身の評価よりも教師の授業改善を目的とするものもあるみたいです。その中において大学入試改革で使用するのには「形成的評価」と呼ばれるものにあたり、学びの過程そのものを評価対象としています。インターネットの検索では「英国では 16 才以上の生徒は自身でポートフォリオを作成し一般職業資格取得に値するだけの学習をした証拠を示すことが義務づけられている」という話も出てきます。どうも自己アピールの資料みたいな感じがします。思い起こすと、教科情報が始まった 2003 年頃、当時の埼玉県 Number2(連載第 2 回参照)はポートフォリオ評価を取り入れていました。一緒にやろうと誘われましたが、「自己評価＝自己満足」という感覚を払拭することができず正反対の評価方法である生徒間相互評価に向かうことになりました。二人でこの議論になると「教科情報の根底はコミュニケーションなので、受け手の評価を取り入れないことはナンセンス」という論陣を張っていました。コミュニケーションの定義も知らなかったくせに(笑)。今もその気持ちはほとんど変わっていません。その後、Number2 は紙(アナログ)を使ってポートフォリオ評価を、伝道師は自作のプログラム(デジタル)で生徒間相互評価を実践し、その研究結果を発表しました(埼玉県情報教育研究会誌第 1 号 2004 年)。このとき作成した自作プログラムが、伝道師の授業では必需品となる IPME(Information Processing of Mutually Evaluation:連載第 5 回参照)になります。

当時の Number2 と伝道師の勝負は、その後の派生や模倣授業を見ると伝道師に軍配が上がったようです(何しろ Number2 は既に情報教育から離れていますし、笑)。ですが、それは生徒間相互評価が教育的に、また評価の正当性から見てポートフォリオ評価より優位であったという訳ではありません。勝因はほとんどコストパフォーマンスでした。教員が紙ベースで評価すること、生徒同士がオンラインでデジタルに評価するのでは、教員の負担は雲泥の差です。これが第一の要因です。また、生徒の学力も問題になります。当時、Number2 は県でも有数な進学校に勤務していて、今も変わりません。一方、伝道師は、進学校から底辺校に近い中間校に異動し、その両方で生徒間相互評価を実践してきました。自己評価の信頼性が担保されるには、自身を評価する生徒の能力が十分に信用できるものでなくてはなりません。何しろそれが唯一の評価なので。生徒間相互評価では多数が評価に参加することで集団による補正が行われます。つまり、個々の評価にばらつきがあったとしても、集計された結果は平均値となるため問題が表面化し難くなります。また、評価内容を教員が監視することで、不自然で非合理的な評価をチェックすることも可能です。逆に自己評価では、生徒本人がそうだと言い切れば反論する余地はありません。伝道師は、生徒の学力が危うい学校でも生徒間相互評価が有効であることを実践し証明してきたのです。評価方法の採用基準は、コストと信頼性が重要なポイントになるのです。

紙ベースのようなアナログのポートフォリオ評価は Number2 の例でも分かるように効率が悪すぎます。そこでアナログの紙ベースからデジタル化することで効率アップを狙ったのが e-ポートフォリオになります。元来ポートフォリオ評価は、何を記録として残し、どう評価す

るのは生徒に委ねられています。高校生のスマートフォンの普及率は限りなく 100%に近いので、生徒自身がインターネット経由で入力すれば教員の手を煩わすことはありません。また、インターネット上にサーバを設置することで、膨大なデータを集積することもできます。そこで、まず日頃から生徒にあらゆる活動の経緯や評価を入力させデジタルデータとして蓄積します。そうすることで教員の作業は入力されたデータの真偽チェックと、志望大学から要求された内容をデジタルで調査書に転送するだけに軽減されます。これなら急激な負担増にはならないだろうと考えたのでしょう。これを実現するために文部科学省が音頭を取って開発が進められたシステムが「JAPAN e-Portfolio」です。このシステムは、昨年度から一般社団法人の教育情報管理機構が運営しており、一部の連携システムは既に実働中です。そして、こともあろうに伝道師の勤務校も今年の春から全生徒を対象に使用しているのです。

「JAPAN e-Portfolio」連携システムの導入の是非が職員会議に議題として上げられたとき、伝道師は強く反対しました。生徒の状況をちょっと観察すれば、これが絵に描いた餅であることに疑う余地はありません。まず問題なのは、生徒が文章を入力しなくてはならない点です。今の平均的な高校生の書く日本語は「この公園には滑り台をする」（連載第 14 回参照）程度で全く当てになりません。伝道師の勤務校など典型的です。各単元が終わる度に授業についてのコメントを入力させ、それを評価する立場なので生徒の書く文章の劣悪さは身に浸みています。残念なことに今年の新入生も同じで、読むに耐えない文章を平気で書いています。それをこまめに指摘することで、自分の日本語が問題であることに気が付く生徒が現れることを希望に授業を続けているのです。教科や科目の課題の日本語が多少妙ちくりんでも大事にはなりません。が、学校長が発行する調査書となると話は違います。つまり、高校生がインターネットに接続したスマートフォンを持っていて、四六時中入力可能な環境があればそれで良い、と言う単純なものではないのです。普通の高校生には調査書で使えるぐらいの日本語にするための指導が不可欠なのです。さらに、真偽の判断や調査書に記載する項目を選択するだけであつたとしても、手間が掛かることは間違いありません。真偽を判断するためには生徒本人と話す必要も出てくるでしょう。記載項目を選択する場合にも、間違っていないかを確認するための時間も必要です。システムからすると承認や選択はワンクリックなので操作は至極簡単です。ですが、そこまでに至る経緯がまったく考慮されていない、本学会の理念とは正反対な、実に人に優しくないシステムなのです。職員会議で反対意見を強く述べたのですが、ほとんど賛同はありませんでした。伝道師の意見が無視された訳ではありません。これで仕事が無尽蔵に増えることをほぼ全員が確信していました。しかし、文部科学省が決めたことに逆らうことに意味を見出せなかったようです。教員は極めて保守的なのです。斯く言う伝道師も、卓袱台をひっくり返すほどの勢いでは反対はしませんでした（ということは普段は…）。定年までの年数を勘定すると「JAPAN e-Portfolio」で調査書を作成することはまずないと判断できたからです（笑）。伝道師が錚を引っ込めたので会議はあっさり終わり、提案通り「Classi(Classi 株式会社）」なるシステムが採用されることが決定されたのでした。

昨年度、伝道師は 3 年生の担任だったので調査書作成を行いました。が、「Classi」のお世話になることもなく旧来通りの遣り方で職務を果たすことができました。全校参加ですから担任した生徒も「Classi」を使う羽目にはなりませんが、連絡やアンケート程度で済んでいます。ですが、下級生はそうは行きません。何かある度に入力させられることになりました。調査は当然として、遠足、文化祭、体育祭、修学旅行などの学校行事、部活動の公式戦、ボランティア活動、各種検定試験などなど可能なものは全て入力を強要されています。先にも書いた通り、ただ入力を促しても正面な日本語にはなりません。そこで、入力の前に時間を取ってまず紙に

書かせます。そしてそれなりの文章を作らせた後に漸く入力になるのです。なぜなら「Classi」は一度入力すると訂正も追加もできないという制限が掛けられているのです。「今は時間がないから、とりあえずの入力をして、後で追記や修正…」などということができない仕組みなのです。教育者からすると唾然とするようなアホシステムです。紙で一度構成してから入力という手順は、生徒にしても無駄で面倒な作業です。さらに、次から次へと入力すべきものが出てきますので、なんだかポートフォリオを完成させるために考査や行事をやっているような本末転倒な雰囲気も出てきます。そうなると、入力そのもの、更にはシステム上の連絡確認をすることさえも拒否する生徒も出てきます。担任はそんな生徒に対して、手を替え、品を替えて入力するように指導するのです。その入力が使われるかどうか分からないのに…。これが大学入試改革に名を借りた恐るべき働き方改革なのです。

風向きが変わってきたのは、英語の民間検定試験が見送られた頃からです。伝道師の勤務校では、年間行事に各種の英語民間検定試験を組み込み、半強制的に生徒に受験を促していましたが、ほぼ無駄となりました。しかも、実施予定の検定料金はしっかり取られています(笑)。次に、採点業務を丸投げした業者に対する公平性の問題から数学と国語の記述式が見送られました。そして、今年 2 月に萩生田文部科学大臣が「JAPAN e-Portfolio」に対し、運用の見直しを行うと発言しました。その理由は「JAPAN e-Portfolio」の利用には「ベネッセコーポレーション」の ID 取得が必須であることが判明したからです。「JAPAN e-Portfolio」を運営している教育情報管理機構の Web サイトには、中核となる特定賛助会員として「Classi 株式会社」、「株式会社 JS コーポレーション」、「株式会社ベネッセコーポレーション」、「株式会社リクルートマーケティングパートナーズ」の 4 社が掲載されています。ですが「Classi 株式会社」の株主は「ベネッセコーポレーション」なので実質 3 社です。「リクルート」は就職関係では最大手と言えるでしょうが、大学入試の分野ではまだまだ新参者です。「JS コーポレーション」は元々専門学校に関する情報紙の発行がメインだったようですが、これまで伝道師がお目にかかったことはありません。名実ともに「ベネッセコーポレーション」がずば抜けていますので、何に付けても他社より優位に事を運べていたであろうことは容易に推測できます。ちなみに、伝道師の勤務校に次期調査書の書式らしきものをリークしたのも「ベネッセコーポレーション」でした。受験生のプライベートなデータを、国のシステムを使ってごっそり、しかも料金をもらって集められる立場を合法的に作り出したのですから感服します。もっと言うと、教員は相当暇だと判断されたようで、「Classi」はクレームの窓口を学校にしているのです。そのため回線やサーバの不良のクレームは学校に寄せられ、そのたびに担当の教員が謝る破目になっています。コロナウイルスによる休業中は回線やサーバのトラブルが多くて本当に大変でした。現場の教員を無給のクレーム担当者にするという「ベネッセコーポレーション」の徹底ぶりには恐れ入るしかありません。文部科学大臣の発言で状況が一変するか、と期待しましたが生憎コロナウイルスの影響でその後の動向は裁ち切れになってしまいました。それでも「JAPAN e-Portfolio」に対するトーンは少しずつ下がっていきます。6 月の初頭に伝道師の勤務校では調査書の備考欄への記入内容は、ポートフォリオというよりも推薦文程度にすることになります。これが管理職の判断なのか県の判断なのかは不明です。そして、6 月 19 日に文部科学省高等教育局長名義で「令和 3 年度大学入学者選抜実施要項について(通知)」が発せられます。この中の「調査書記入上の注意事項等について」には次のように記述がされています。なお、強調点は伝道師が付けています。

「備考」の欄には、大学の希望により該当大学の学部等に対する能力・適正等について、特に高等学校長が推薦できる生徒についてはその旨を記入すること。

この通知により、大学からの要望がない、又要望があったとしても特に学校長が推薦できるような内容がなければ記入の必要はないことになりました。伝道師の同僚が調べたところ、具体的に関係しそうな大学は1つだけだったそうです。つまり、「JAPAN e-Portfolio」はほぼ無用なものになったわけです。そして、冒頭の教育情報管理機構に対する運営許可取り消しのニュースとなるのです。

文部科学省が掲げた大学入試改革の3つの柱はほぼ全て無に帰したことになります。その理念はともかく、何故ここまでして現実性の乏しいことを推し進めようとしたのでしょうか。また、何故もっと早く止められなかったのでしょうか。果たして我が国の教育行政は十分に機能していたのでしょうか。一連の流れを見る限り、理念よりも別のものが優先された、という疑念は拭えません。特に「JAPAN e-Portfolio」は、理念よりもシステムが先行していたように思えます。もっと言うと、生徒の主体性云々と言う理念は、単にシステムを使わせるため作られた偶像のように見えるのです。「大山雷同して鼠一匹」、そうとも言えません。NHKの報道によれば、「JAPAN e-Portfolio」に既に参加している生徒は18万人になるそうです。伝道師の生徒達もこの中に含まれます。彼らのプライベートなデータと、年間約3,900円の使用料は帰ってこないのです。

ところで「JAPAN e-Portfolio」に参加した生徒数がかなり少ないことに気付かれたでしょうか。文部科学省の白書によると、全国の高校生の総数は通信制を除いても約316万人なので18万人は全体の5%プラスα程度です。つまりほとんどの高等学校は、今年度の入試から使われるのにも関わらず「JAPAN e-Portfolio」にまだ参加していないのです。文部科学省が教育情報管理機構の運営許可を取り消す理由として、入試に利用する大学が少ないことと、またそれに伴う財政上の安定が見込めないことを上げています。一時は120校近くが参加を表明していましたが、今年度の入試から使用しているのは国公立が4、私立が16、短大が2の22校に過ぎません。しかも、その全てが一般入試で使う、ということもないようです。また、参加校に深く関係する人物が教育情報管理機構の役員としても名を連ねています。まあ自分が役員をしているので参加せざるを得ない、というのが真相かも知れません。この状況を見越していたかのように、ある学力レベル以上の高等学校では端から「JAPAN e-Portfolio」などに興味も感心もありませんでした。何故なら、ほとんどの生徒が一般受験で大学を目指すので、調査書など形式的な書類に過ぎないからです。調査書の内容を云々するよりも、テスト対策の方が遥かに重要なのです。また逆に、学力が低く大学に進学する生徒が少ない高等学校も興味を示しませんでした。そんな高等学校では、大学入試改革などというものの自体に意味がありませんから。結局振り回されることになったのは中途半端な高等学校になります。更に、その中でも大学進学に触手を伸ばそうと目論んでいたところです。そうです、伝道師の勤務校は鴨葱にされたのです。アァ〜、やっぱり「大山鳴動して鼠一匹」だったか…。

さて、今回のテーマは如何だったでしょうか。え「お前の愚痴ばかりで、ちっとも面白くない」、ですか。伝道師としては、使用する現場とシステム設計が乖離した不幸な一例になれば良いと思ったのですが…。次回も、教育現場とIT機器やコンピュータシステムに関する内容を、不評を顧みず、勝手に考えてみようと思っています。

皆様からのご意見・ご感想などをお待ちしております。